

社員旅行

土居 清美

十六年前、カンボジアに単身赴任し日本語学校を立ち上げた。初の海外赴任に加え、学校の設立運営と言う未知の世界への不安と、やりがいと言う希望に満ちていた。政府への学校認可申請から仕事は始まった。苦難の連続だったが、カンボジア人スタッフの頑張りと優しさに救われる日々でもあった。酷い雨漏りや延々と続く停電など通常運転がなかなか思う様に行かなかった。何とか軌道に乗ってきたかな、と感じたのはおよそ一年後の頃だった。頑張ってくれたスタッフを慰労したく、皆で旅行に出かけるのはどうかというアイデアを思い付いた。オフの時間を共に過ごす事で親交を深められたらとも思ったし、カンボジアの観光も楽しみだった。その一方、予算が無く皆から参加費を徴収しなければならない事と日本若者と同じく社員旅行になど行きたがらないかもしれないという懸念もあって、恐る恐る提案したのを覚えている。毎日行っていた夕礼の事だ。すると、最年長の女性スタッフが、「え？何と仰いましたか？」と皆を代表するかの様に聞いてきた。こんな時の日本語は抜群に上手だ。「だから、一泊の社員旅行に行かないか？とみんなに提案したんだけどね」と答えた。一瞬の間が続いて、スタッフみんなが顔を見合わせながら「やったー！行きたい！海がいい！」と口々に叫び出した。中には立ち上がって踊りだす者もいた。まさかこんなに喜んでくれるとは思わず、感激した。良かった、みんなも一緒に遊びたかったのだ。その翌朝、一人の男性スタッフ（プット君）から相談があると言うので別室で聞いた。開口一番彼は言った。

「社員旅行の件ですが、両親も連れて行って良いですか？是非お願いしたいのです」私は耳を疑った。まさかの相談である。更に彼は言った。家族を連れて行きたいスタッフは他にもいる筈だから、みんなにも聞いてあげてください、と。そんな事があるのかと半信半疑ながらその日の夕礼で聞いてみた。

「昨日話した社員旅行の事だけど、家族も連れて行きたいって人はいるのかな」すると、全員が目を輝かせて「はい！」と答えるではないか。まさかの展開である。

観光もしながらのお気楽な社員旅行では済まなくなってきた。スケジューリング、安宿探し、バスの手配、バーベキュー食材調達、遊具集め等にチームを分け、準備は万端怠りなく彼ら主導で進められて行った。以降夕礼では、業務関係は後回しとなり、各チームの旅行準備報告が主要議題と化していた。

食材調達の報告で、あるスタッフが発言した。「私は両親と相談した結果、家で飼っている鶏を四羽ドネーションします」これに一同は大いに盛り上がった。生きている鶏を持って行き現場で捌いて料理するのだと言う。

スケジューリングの報告ではこうだった。「バスで六時間かかるので、朝五時出発にしたいと思います」これに対しても一同が「いいねー！早く行って沢山遊ぼう！」と反対の声はかけらも出なかった。遠くから参加するご家族は大丈夫か？と私が聞いたら、「全然大丈夫です。暗いうちに出れば間に合いますし、きっと喜びます」と答える。

いよいよ出発の日となった。出発の5時間前には見事に全員が揃っていた。初めて会うご家族の方々とのご挨拶もそこそこに、バスは出発した。すると間もなく朝食のパンが配られた。大歓声である。食べ終わる頃には、カラオケの準備が整い、のど自慢大会が始まった。その間に配られるマンゴーやランブータンなど自宅で採れた果物たち。あつと言う間に時は過ぎ、到着地に近付いて来た時、一人の女子スタッフが大声で叫んだ。「海が見えましたー！海だー！Oh my countryー」続いて皆もまた口々に叫んだ。何と賑やかで楽しく、心洗われる旅行だろう、と喜びを噛み締めた。昼食が終わり、砂浜で遊ぶ者、海で泳ぐ者、貝や魚を捕って来る者、それぞれが大いに楽しんだ。

海辺がきれいな夕日に染まり始め、そろそろ宿に向かう時間だと思った頃、ふと見ると波打ち際に老夫婦が浅瀬に浸かって佇んでいた。プット君のご両親だった。長い時間こうして海を楽しんでいたらしい。プット君を見つけて、「そろそろバスに戻るように言ってきた」と頼んだ。その時彼は言った。「両親にとって海は人生初めてでした。見るのも触るのも、しよっぱいのも、砂浜も、何もかもが初めてでした。私は両親のこんな姿を見る事が出来て、とても幸せです。今回社員旅行に参加させて頂いて、本当にありがとうございました」

私は言葉が出なかった。代わりに熱いものが心の底から込み上げて来た。ありがとうはこっちの台詞だ。感動と感激と感謝の旅行は生涯忘れられぬ思い出として、今も心に焼き付いている。